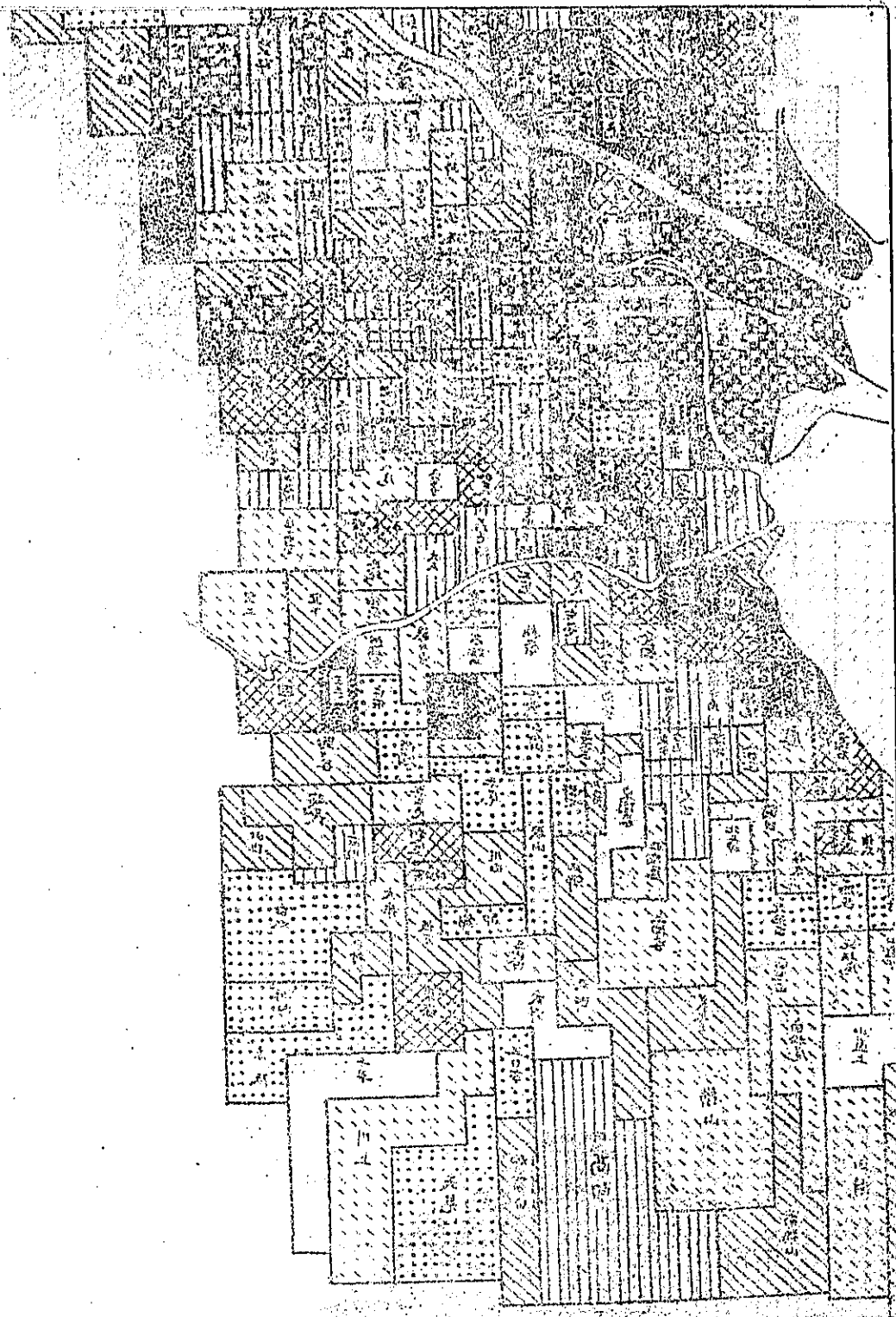




今大阪府の乳兒死亡狀況を地方的に觀察するに其の狀況は左圖に示すが如く概して都市及び之に接續する周圍町村と北部山地農村とに乳兒死亡が最も高い、即ち一は大阪、堺、岸和田市及び吹田、茨木町を中心とするもので、所謂都市的影響に基くものと想像するもので、他は北部山間僻地の農村で南部の同様な地勢の農村に比し乳兒死亡率が著しく高きは恐らく該農村地方の氣候的關係が大いに影響を與ふるものなることを思はしむるのである。

今本邦の代表的都市即ち六大都市の乳兒死亡率を歐米各國の都市に比較すれば左表の如くで歐洲諸國に於ては過去數十年既に乳兒死亡率低下に就て諸種の研究を重ねると共に社會的國家的に努力したる結果近年其効果は著しく顯はれ乳兒の死亡率は年々漸進的に下降して來た、然るに本邦都市に於ては他國の主要都市に比して驚くべき高率を示して居るのみならず、其の死亡率は現今尙ほ年と共に増加するの傾向を有し各文明國の何れの都市に於ても見られざる現象を呈して居るのは實に邦國の爲憂慮に堪へざる處である然れどもこの本邦に於ける現象は必ずしも本邦獨特のものではない、先進國の永き經驗を觀るに英佛獨の如き乳兒死亡低減に對し夙に大なる努力を拂ひし諸國は既に其の率年々遞減し其の効果大に見るべきものがある、然るに此の問題に對し比較的努力の跡少き露國の如きは今尙依然として舊態を改めざるが如きを考ふれば本邦に於ける乳兒死亡も亦今後の努力の如何により必ずや歐米文明國に於けるが如く更に進んで之を生理的限度にまで人爲的に減退せしめ得ることは蓋し難事

の業ではなからう。

各國都市に於ける乳兒死亡率比較 (生産千に付)

東京市	一六四(大正八年)
京都市	一八二(大正九年)
大阪市	二四六(大正九年)
横濱市	一八〇(大正九年)
神戸市	二三六(大正九年)
名古屋市	一五四(大正九年)
倫敦	一〇七(大正七年)
紐育	七三〇(大正十年)
コロムビア	六八〇(大正十年)
桑港	五二〇(大正十年)
カンサス	七一〇(大正十年)
ルイズビル	七三〇(大正十年)
バルチモア	一四七(大正十年)

ボストン	二四八(大正十年)
セントポール	五四〇(大正十年)
デトロイト	一〇七(大正十年)
シヤイトル	五三〇(大正十年)
フィラデルフィヤ	七八〇(大正十年)
コロンブス	八〇〇(大正十年)
ワシントン	一一〇(大正五年)
モントリオール	一八五(大正五年)
パカレスト	一九〇(大正三年)
エデンバラ	一〇〇(大正五年)
コッペンハーゲン	一〇三(大正三年)
ベルリン	八二〇(大正五年)
ストックホルム	八〇二(大正三年)
バンクーバー	六二七(大正五年)
アムステルダム	六四九(大正三年)

マンチエスタ	(英)	一〇七〇(大正七年)	九六〇(大正九年)
ニューカッスル	(英)	一〇八〇(〳)	一〇〇〇(〳)
ダーリングトン	(英)	一一四〇(〳)	九二〇(〳)
ワトリングトン	(英)	一〇一〇(〳)	九一〇(〳)
ヨーク	(英)	九七〇(〳)	六三〇(〳)
リヴァプール	(英)	一二六〇(〳)	一一三〇(〳)
バーミンガム	(英)	九七〇(〳)	八三〇(〳)
プリントル	(英)	九二〇(〳)	六九〇(〳)
リンコルン	(英)	七三〇(〳)	七九〇(〳)
オックスフォード	(英)	六二〇(〳)	五三〇(〳)
カンタベリー	(英)	五八〇(〳)	六二〇(〳)
ブレイトメン	(獨)		一四八五(明治三十七—四〇年 一九〇四—一九〇八年 五ヶ年平均)
スットガルト	(獨)		一八〇二(〳)
ストラスブルク	(獨)		一八九六(〳)
ミュンヘン	(獨)		二一〇二(〳)

ライプツヒ	(獨)	二〇三七(〳)
ハンノヴェー	(獨)	一五五五(〳)
ハムブルク	(獨)	一六〇二(〳)
フランクフルト	(獨)	一四九九(〳)
ドレスデン	(獨)	一七六九(〳)
ケルン	(獨)	二〇九五(〳)
グレスラウ	(獨)	二三三二(〳)
アルトナ	(獨)	一七八八(〳)
柏林	(獨)	二三八五(〳)

今ニューヨーク、シカゴ、ボストン、マンチエスタ、ハムブルヒの諸都市に於ける乳兒死亡を一九一三年より一九二二年に涉りて調査したるもの並に米國兒童局調査による同國各都市の生産一〇〇に對する乳兒死亡率を表示すると次ぎの如くである。

外國著明都市乳兒死亡年次別 (生産百に付) (藤原氏に據る)

都 市	年 次	一九二三年	一九二四年	一九二五年	一九二六年	一九二七年	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年
紐 育		一〇・三〇	九・五〇	九・八三	九・三三	八・八八	九・二七	八・二六	八・五四	七・二		

シ カ ゴ				一四四六	一三三九	一三二三	一〇〇九	九九五	八九三	八五五
ボ ス ト ン						一二四八	九六八	一〇〇九	七七三	
マン チ エ ス ター	一二八七	一二八六		一二二三	一二二三	一〇六七	九七八	九七二	九七〇	
ハン ブ ル ヒ		一二三二	九九九	一〇三二	一〇二七	一〇二六				

乳兒死亡率 (生産百に付) 合衆國労働省兒童局調

米 國	年	一九一〇年	一九一五年
シ ヨ ン ス タ ウ ン (ペンシルヴァニア)		一六五	一一・六
マン チ エ ス ター (ニューハンプノシア)		一九三	一五・〇
ブ ロ ッ ク ト ン (マサチューセツト)		九九	八・二
サ ギ ノ (ミシガン)		一四五	一〇・一
ニ ュ ベ ッ ト フ オ ー ド (マサチューセツト)		一七七	一四・三
ウ オ タ ベ リ ー (コネチカツト)		一四九	一四・三
ア ク ロ ン (オハイオ)		一二三	

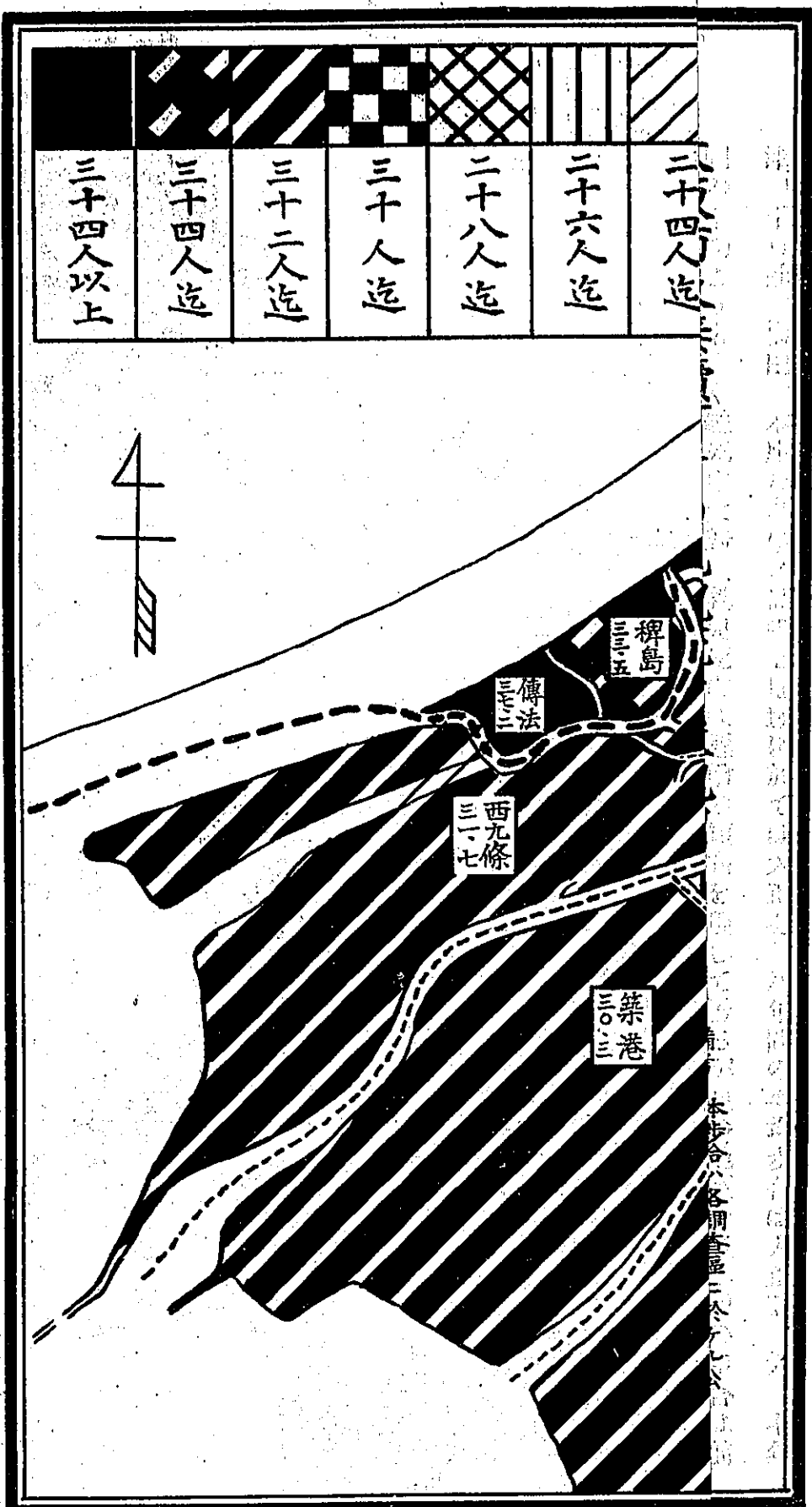
上述の如く本邦都市の乳兒死亡率は各國都市に冠たりと雖必ずしも全市に亘りて死亡夥多なるに非ら

ざるべく各地方の經濟的、社會的關係は該地方の乳兒死亡に多大の影響を與ふるものである。

曾てジュネーヴ大學教授ヘルシュ氏は一九一一—一九一九年間の巴里市の統計に基き全市を社會的、經濟的關係に應じ之を分割し富裕、中流、貧民及び赤貧地區に分ち各地區に於ける乳兒死亡狀況を觀察した、其結果巴里市に於ける乳兒死亡は極貧地區に最大で生産千に對し一五一・を算へ富裕地區に於ては僅に五一・%なるに過ぎずと報告して居る、又エディン及びカンブ氏(Eddinu. Camb)はフライトン町を居住者の種類階級により市區を分割し一九〇一年より一九二〇年に亘り乳兒死亡の狀況を調査したるに其成績は最も貧困なる家族居住地區に於て死亡率最も多く其率は生産千に付一三三を示し、不熟練職工、技術工及び勤人居住地區は之に次ぎ、商人實業家等富裕者の居住地區は其の死亡率最も少く僅々六〇%で最貧困者居住地區に比し半數にも満たなかつたことを報告して居る。

夫れで本邦に於ける狀況は如何と謂ふに此の種の統計は甚だ乏いが之を最近警視廳衛生部の調査(大正九年)並に大阪府衛生課の調査成績に基いて觀察するに東京市の生産千に對する乳兒死亡は俗稱下町に屬する本所、淺草、深川、下谷の諸行政区に多く其率は二三・一—一八・八%に達して居るが山の手地方は四谷區(一八五)を除く他は其の率八四—一二五に止まり死亡の比較的僅少なるを見るのである。又同市の總死亡と乳兒死亡との關係は略ぼ前者と同様で本所、深川、淺草、下谷は總死亡千に付乳兒死亡歩合は二二八—一八五に當り山の手方面の四谷區(二二〇)及び麻布區(一八一)は之に

次ぐものなるが其の他は一般に死亡歩合少く一二八乃至一五六に過ぎない、之に依つて見れば東京市の乳児死亡は概して富裕地區に少く細民地區に多きことを示して居る。次に大阪市の各地に於ける總死亡と乳児死亡との關係を見るに其狀況は左表に示すが如くで、大正五年以降同九年に至る五箇年間の大阪市の總死亡は平均一箇年男一四、八〇四、女一四、四二一で内乳児死亡は男三、九〇六、女三、四三一となり、總死亡百に對する乳児死亡歩合は二五・一に當つて居る。今此の總死亡と乳児死亡との關係を當府に於て定めたる地域に就て觀察するに其の歩合は概して市の中央部に最も少く之れより遠心性に其の歩合は漸次増加し周圍部に於て最も多きを見るのである。即ち舊市部に於ては木津、三軒家、築港、西九條、西野田地區は最も多く三〇・％以上に達し日本橋、今宮、難波、九條、本庄及び東野田地區は之に次ぎ二八％を占め福島、梅田、天満、玉造、高津地區は稍少く二四％内外を示して居る、而して靱、新町、堀江、千日前、上町及び天王寺の如き市の中央に近き地域並に住宅別荘地區と目せらるゝ地方は其の歩合比較的少く二〇―二三％を示し市の中央部に位する船場、島之内及び中ノ島地區は全市中乳児死亡歩合最も僅少にして一八％を算ふるに過ぎない。又舊市接壤町村に於ける狀況を大正五年の調査成績に就て見るに乳児死亡歩合は舊市部に比し著しく多く生野（一五・二％）、天王寺（二〇・四）、中津（二七・五）及び榎並（二八・六）地區を除きたる他の十二箇町村は何れも三二・％以上で殊に津守、今宮、城東、鯉江、及傳法地區の如きは三六％強に達して居る、そして今以上の五箇



備考
本歩合ハ各調査區ニ於ケル公
私立病院内死亡者ヲ含マス

大阪市ハ自大正五年五ヶ年平均
至同九年
接續町村ハ大正五年一ヶ年
各調査總死亡百ニ對スル乳兒死亡比率合





大阪市各行政区の乳児死亡率分布図

此図は、大正五年、大正七年、大正八年、大正九年の平均値を示す。凡そ、死亡率の低い地区は、商業地帯及び土地高燥で、死亡率の高い地区は、住宅密集地帯である。

年間の乳児死亡歩合を前後各三箇年毎に平均し前後年間に於ける死亡の増減を窺ふに上町、玉造、高津、千日前、梅田、本庄及び中ノ島の七地域に於ては大正七、八年間の平均歩合は大正五、六、七年間の平均よりも多く總死亡に對し乳児死亡は遞増の傾向を現して居るが他の地區は後年間の歩合は前年間のものより少く遞減の状態を示して居る。

茲に上述の數字により大阪市の乳児死亡状況を考察するに大阪市の乳児死亡歩合は概して市の周圍部に多い、殊に舊市の接續町村で大小の工場が多數に存在して居る處或は家庭工業の盛なる地區に最も多い、そして其歩合は漸次市の中央部に求心性に遞減して居ると雖、富の程度低く、不良家屋密集し密居の状態にある地域に於ては遞減の率は僅少である、そして市の中央に近き商業地帯及び土地高燥で富裕者或は知識階級者の住居地である地帯は其の歩合比較的少く、富の程度最も高き中央商業地域は全地域中この歩合が最も僅少である。

大阪市各地域に於ける乳児死亡 (大正五年—大正九年平均) (大阪市衛生課保健衛生調査部)

舊市之部			
地名	調査地	乳児死亡百に付歩合	乳児死亡百に付歩合
上町	船場	一八・三九	二五・五一
高津	玉造	二二・七四	二四・二三
新町	堀江	二〇・八五	二二・七三

靴 三軒家	九 條	築 港	西 九 條	島 ノ 内	千 日 前	日 本 橋	二二・七九	三〇・八六	二八・三五	三〇・三一	三一・六七	一八・三四	二二・八五	二九・二五	難 波	天 王 寺	今 宮	木 津	東 野 田	天 滿	梅 田	福 島	二七・九三	二三・〇二	二八・二六	三五・五八	二八・一〇	二二・七〇	二四・八三	二五・五三	本 庄	西 野 田	中 ノ 島	計 平 均	病 院	合 計 平 均	二八・四三	三一・四六	一八・〇八	二六・五四	八・三七	二五・一〇
城 北	榎 並	餘 江	城 東	中 本	三五六〇	二八・五七	三六〇五	三六・四七	三四・五〇	神 路	鶴 橋	生 野	天 王 寺	豐 崎	三・五八〇	三三・〇八	一五・二五	二〇・四一	三三・〇二	中 津	鷺 洲	稗 島	傳 法	今 宮	二七・五二	三二・四〇	三三・五一	三七・一五	三六・八二													

新編入地（舊市の接續町村）		地調 査 名 區	乳 總 死 亡 百 に 付 合	地調 査 名 區	乳 總 死 亡 百 に 付 合	地調 査 名 區	乳 總 死 亡 百 に 付 合
城 北	榎 並	城 東	中 本	城 北	榎 並	城 東	中 本
三五六〇	二八・五七	三六〇五	三六・四七	三四・五〇	三・五八〇	三三・〇八	一五・二五
二〇・四一	三三・〇二	二七・五二	三二・四〇	三三・五一	三七・一五	三六・八二	

津
守

三六四九 計 平均

三二〇四

備考

本表調査區中舊市に屬するものは、行政區劃に據らず、地方の社會的經濟的事情を斟酌し、土地の狀況に應じて、市内を廿五箇の調査區に區分したもので、新編入地は舊市の接續町村の區劃により定めたものである。

又其統計材料は舊市内は大阪府の、死體檢案簿に基き、接續町村は、埋葬認許證下附簿に據り、蒐集整理したものである。而して之等の内、死亡場處が大阪市及其接續町村にあらざるものは、勿論之を捺除し、又調査地域内に散在する、公私立病院内死亡は、必ずしも調査地在住者に限らないから、之等を一括して調査區地名に病院欄を加へたものである。

要するに本邦の乳兒死亡率の特徴は、年々遞増し數十年來降下の跡あるを認めない。而して大都市の死亡率は、地方よりも高い。然れども地方の死亡遞増率は、近年大都市よりも多い。而して本邦中乳兒死亡の最も多いのは、大阪府を中心とする近畿地方、石川、福井、富山縣に連る、北陸地方、青森、秋田、山形縣に連る、東北地方及千葉縣を中心とする關東地方である。又都市に於ける乳兒死亡率は、概して富裕地區及び知識階級者居住地に少く、然らざる者の居住地、並に家庭工業の盛なる地域に多い。

四、生産率と乳兒死亡率

生産率高く生兒の數多き邦國に於ては必しも特別の原因なくとも乳兒死亡率は幾分高さを増し生産率低き邦國に於ては乳兒死亡も亦多少低率で生産率と乳兒死亡率との間には相聯的關係がある、今本邦並に歐米各國の生産率を一九一一年（明治四十四年）より一九一五年（大正四年）に至る五箇年の平均に

付き見るにルーマニア、智利、セルビア、ブルガリアの數箇國は本邦よりも生産高く伊太利、奧地利、和蘭、獨逸、英蘭、其の他の諸國は我が國に劣つて居る。それで一般に言へば我が邦の生産率は現今諸文明國に比し確に高き部位に屬して居る。

然れども歐洲諸國に於ては其の生産率は從來より低率なるにあらず、二三の邦國を除く他は近來年々減少の結果を現し殊に最近三、四十年來然るを見る有様で佛蘭西の如きは十九世紀の劈頭には可成りの生産率を有し一八〇一年乃至一八一〇年の平均に於ては人口千に付三三・九%なりしが其の數間斷なく低落し一九〇一年乃至一九一〇年には二〇・七%と云ふ他國に類例なき低率を現すに至つた、英虞蘭に於ては一八二〇年代の始めより出生率の低下の傾向現われ爾來其の勢ひ止むことなく、又獨逸に於ても同年代より低下し始め殊に第二十世紀の初め以來は著しく遞減して來た、又其の他の諸國も概ね同様の現象を呈し濠洲に於ても既に千八百七十年代より初まり殊に一八九〇年代より甚しく低下し來り最近歐洲諸國の出生率は從前よりも一層甚しく遞減するの傾向を有するに至つた。

然るに本邦に於ける生産率は歐米に於ける狀況と全く趣きを異にし歐米諸國の年々遞退するに反し年々増加し來り最近に至り一時停止するやの狀態を示して居る、即ち一八八六年(明治十九年)以來の生産率を五箇年毎平均により見るに明治十九年乃至二十三年の生産率は二八・五なりしが爾來年々増加し明治四十四年乃至大正四年の平均は最高に達し三三・五となり次の五箇年平均に於ては一時的減耗

の微顯れたるが如きも翌大正十年及び十一年の狀況は再び上昇するの兆あるが如き狀況を示して居る、即ち本邦に於ける出生率は遞退の傾向を見ずして年々増進の趨勢を有し歐米に普通なる曲線と全く反對の方向に進みつゝあるものである、然れども之れは單に曲線の方向を談したるもので之れと同時に吾人の忘るべからざるは我が國の從來の出生率は歐米各國に比し低きものなりしが最近に至つて歐洲各國に於ては近來益々出生率を減少するに反し我が國に於ては上騰の勢を停止せざるが故に漸く普通並より高き率を示すに至つたことである。

翻て生産率と乳兒死亡との關係を見るに歐米各國に於ては一般的に生産率低下と共に乳兒死亡は漸次遞減し前述の如く諸威、瑞典、愛爾蘭、英虞蘭、丁抹、和蘭、瑞西の如きは最近生産百に付乳兒死亡は一〇・以下に遞減し殊にニュージーランドの如き生産率には大なる動搖を見ざるに乳兒死亡は年々低下し最近に於ては五・二なる率を示すに至つた、又智利、ルーマニアの如きは生産率は増加の傾向あるに拘らず乳兒死亡は年々降下して居る、之れに反して本邦は年々生産率増加せるを以て其の影響により乳兒死亡は多少増加するを免れずと雖、其の死亡率増加の歩合は甚だ著しく大正五年乃至大正九年の五箇年平均の如き生産率は前五箇年平均に比し稍減率(〇・八)を示せるに拘らず乳兒死亡は却て近來稀に見る高率にして生産千に付一七四・となり前五箇年平均率を超過すること二三・に及んで居る。

二階堂氏は國々の狀勢により多少の相違は免れざるは勿論なれども一般に生産率増加の場合に於ては人口千に對する生産率の一を増す毎に生産千に對する乳兒死亡率の一乃至二迄を加ふことは特別の原因なくとも生産率の影響と見做すことが出来る、又之に反して生産率の下降せる場合に於ては何等特別の原因なくとも乳兒死亡率は多少下降し生産率の減耗一あるときに乳兒死亡率は二以上の減少を見ること多く其の影響は生産率上昇の場合よりも減耗の場合が大なる様であると唱道して居る。

今二階堂氏の計算法により明治十九年以降大正九年に至る生産と乳兒死亡との増減の關係を見るに、この期間に於て生産率は四・六を増したるに乳兒死亡率は五七・〇の増加となり乳兒死亡の増加率は甚だ著しい、そして此の狀態に於て生産率の影響としての乳兒死亡率は九・二以上を増加せざる筈なるに之れを超過すること實に四七・〇である、即ち本邦に於ては生産率の影響以外に乳兒死亡率を増加すべき強き原因が他に働きつゝあることを想わしむるのである。

各國生産率（人口千に付）（衛生局年報）

國名	年	智利	ルーマニア
1886—1890	明治19	35.5	40.9
1891—1895	明治24	37.0	41.0
1896—1900	明治29	35.0	40.3
1901—1905	明治34	36.1	39.4
1906—1910	明治39	38.3	40.9
1911—1915	明治44	36.4	42.2
1916	大正5	33.1	41.4
1917	大正6		
1918	大正7		
1919	大正8		
1920	大正9		
1916—1920平均	大正5—9平均		
1921	大正10		

セルビア	ブルガリア	日本	匈牙利	葡萄牙	意大利	西班牙	奧地利	和蘭	芬蘭	獨逸	ニウゼーランド	丁抹	蘇格蘭	諾威	英虞蘭及威爾斯	瑞典
43.7	35.9	28.5	43.7	33.0	37.5	36.0	37.8	33.6	35.5	36.5	32.1	33.4	33.4	30.8	33.4	28.8
43.3	37.5	28.6	41.7	33.0	36.0	35.3	37.4	33.9	32.8	36.3	27.7	30.4	30.5	30.3	30.5	27.4
40.1	41.0	32.1	39.4	30.3	34.0	34.3	37.3	33.1	33.6	36.0	25.7	30.0	30.0	30.1	29.3	26.9
38.7	40.6	33.7	37.3	33.3	33.6	35.0	25.6	33.5	33.3	34.3	26.6	29.0	28.9	28.6	28.1	26.1
36.6	43.3	33.7	36.3	33.4	33.5	33.0	33.6	29.6	31.0	33.6	27.1	28.1	26.9	26.3	26.1	25.4
37.2	36.7	33.9	33.7	33.0	32.4	31.0	30.8	27.7	27.5	26.3	26.0	25.8	25.4	25.2	23.6	23.2
39.2	37.2	33.7	33.7	33.1	32.1	28.9	29.3	26.5	24.0	15.3		24.3	23.8	23.1	22.9	23.1
		33.6	33.4	30.4	29.0	28.8	28.8	26.1	24.8	23.9		23.7	23.1	22.5	21.8	20.8
		33.3				29.4	14.4	24.8	23.8	13.9		24.3	23.3	22.3	17.7	20.3
		33.6				28.3	18.0	24.3	19.3			23.7	22.7	22.0	18.5	20.3
		36.3				30.2		28.3		25.9		25.7	26.2	26.7	25.5	23.6
		33.2				29.1		26.0		18.4		24.1	24.8	24.8	20.5	22.4
		35.1						27.5							22.4	

露西	佛蘭	白耳	愛爾	瑞西
亞西	西義	蘭義	蘭西	西
四・三	三・二	二・九	三・八	二・五
四・三	三・三	二・九	三・〇	二・七
四・三	二・九	二・九	三・三	二・五
四・七	二・三	二・七	三・三	二・一
四・五	一九七	二四六	三三四	二六四
平均	一九四	二〇七	三三七	三三七
九四	三八	三〇九	二八七	二八七
一〇四	二二	一九七	二八二	二八二
一二二	二二	一九九	二八四	二八四
一三四	一六五	二〇五	二八七	二八七
一三三	二二六	二二三	二〇二	二〇二
一三二	二四七	二〇六	二八八	二八八

三〇

本邦の生産率と乳兒死亡 (衛生局年報)

人口千に付生産	生産千に付乳兒死亡
明治十九年—二十三年	二八・五
〃 二十四年—二十八	二八・二
〃 二十九—三十三年	三一・六
〃 三十四—三十八	三一・八
〃 三十九—四十三	三二・七
〃 四十四—大正四	三三・五
(-) (+) (+) (+) (+) (-)	〇・三 三四 〇・二 〇・九 〇・八 〇・四
一二七	一四七
一五三	一五四
一五八	一五八
一五七	一五七
(+) (-) (+) (+) (+) (+)	三〇 六 一 四 一 七

大正五	三三・一
〃 十	三五・一
〃 十二	三四・二
(-) (+)	〇・九 二・〇
一七四	一六八
一六六	一六六
(-) (-)	二 六

更に本邦各地方に於ける生産率を見るに左の如し

地方別人口千に對する生産率 (統計年鑑)

地方別	大正十一年	十二年	十三年	平均	地方別	大正十一年	十二年	十三年	平均
北海道	三三・九	三三・七	三四・五	三三・九	栃木縣	三三・八	三三・九	三六・〇	三三・三
青森縣	四〇・九	四〇・六	四〇・五	四〇・九	群馬縣	三六・一	三七・〇	三五・五	三七・三
岩手縣	四〇・三	四〇・二	四〇・三	四〇・三	埼玉縣	三六・四	三六・四	三六・八	三七・一
宮城縣	三九・四	四〇・一	四一・〇	四〇・四	千葉縣	三六・五	三六・七	三四・八	三五・二
秋田縣	四〇・七	四二・六	四二・三	四二・九	東京府	三〇・六	二九・〇	三〇・九	三〇・三
山形縣	三九・三	四一・八	四一・〇	四〇・七	神奈川縣	三三・七	三三・五	三三・〇	三三・〇
福島縣	三六・三	三六・八	三六・〇	三六・九	新潟縣	三七・六	三八・三	三七・五	三七・八
茨城縣	三五・九	三六・一	三五・七	三五・二	富山縣	三七・四	三八・九	三九・四	三八・四

三二

石川縣	福井縣	山梨縣	長野縣	岐阜縣	靜岡縣	愛知縣	三重縣	滋賀縣	京都府	大阪府	兵庫縣	奈良縣	和歌山縣	鳥取縣	島根縣
三・四・一七	三・六・三〇	三・四・一九	三・四・二一	三・六・三三	三・六・四五	三・四・三六	三・四・九七	三・三・二四	三・〇・二四	二・九・四五	三・二・六九	三・三・八四	三・三・五三	三・三・三七	三・三・〇四
三・三・五九	三・六・二六	三・五・二二	三・三・六四	三・八・四七	三・六・六七	三・六・六四	三・六・五九	三・八・八九	三・〇・〇〇	二・九・九五	三・三・三四	三・五・五三	三・四・一五	三・三・九八	三・三・二九
三・四・六四	三・六・四〇	三・四・八〇	三・三・九〇	三・九・〇〇	三・六・八七	三・五・四四	三・四・二〇	三・三・二八	二・九・三三	二・八・四六	三・〇・五四	三・三・二二	三・三・二六	三・三・三三	三・三・四二
三・四・一	三・六・三	三・四・七	三・三・七	三・七・三	三・七・三	三・五・五	三・五・三	三・三・四	二・九・九	二・九・三	三・五	三・四・二	三・三・七	三・三・五	三・三・三
岡山縣	廣島縣	山口縣	徳島縣	香川縣	愛媛縣	高知縣	福岡縣	佐賀縣	長崎縣	熊本縣	大分縣	宮崎縣	鹿兒島縣	沖繩縣	全
二・九・八一	三・四・四七	三・〇・六四	三・四・八一	三・七・四一	三・五・〇三	三・二・七三	三・〇・四二	三・四・九九	三・三・三六	三・三・九六	三・四・四〇	三・三・三三	三・四・二八	二・六・七五	三・四・一六
三・二・四四	三・四・七一	三・四・七	三・七・六〇	三・八・四三	三・七・九	三・四・一五	三・〇・九四	三・七・三三	三・三・七九	三・四・五五	三・六・二	三・三・三	三・四・一六	二・四・〇三	三・四・九四
二・九・四〇	三・三・〇七	二・九・九	三・四・五八	三・六・四五	三・三・九六	三・三・三	二・九・二五	三・四・五五	三・四・七	三・三・〇七	三・四・七九	三・三・四	三・三・六三	三・三・四五	三・三・七九
三・〇・三	三・四・一	三・〇・七	三・五・七	三・七・四	三・五・四	三・三・七	三・〇・二	三・五・六	三・三・二	三・三・五	三・五・三	三・三・〇	三・三・七	二・四・七	三・四・三

大都市別人口千に對する生産率 (統計年鑑)

全國平均	市區平均	大阪市	神戸市	京都市	名古屋市	横濱市	東京市
元正	二・六・九〇	二・三・八四	二・六・五三	二・八・六七	三・〇・三三	二・五・〇六	二・七・五〇
二年	二・七・六〇	一九・三五	二・四・九〇	二・六・五五	三・〇・〇八	二・五・五三	二・七・三
三年	二・七・七三	二〇・三四	二・五・四三	二・五・九五	二・八・三七	二・六・七八	二・八・七四
四年	二・七・〇七	一八・七一	二・四・六〇	二・四・三四	二・七・六三	二・五・五四	二・八・三〇
五年	二・六・二四	二〇・三九	二・五・二〇	二・三・〇一	二・六・三三	二・四・二九	二・七・四〇
六年	二・四・九三	一八・七〇	二・四・三八	二・二・五〇	二・五・七六	二・五・一六	二・八・八三
七年	三・〇・五	二四・四〇	三・一・六	二・二・四	二・七・七五	二・四・〇七	二・四・三九
八年	三・六・三	二八・四八	二・六・九二	二・九・四五	三・四・五	二・六・〇〇	二・六・〇一
九年	三・五・一〇	二八・二六	二・七・一〇	二・七・五	二・六・七六	三・〇・五四	二・九・七
十年	三・四・一六	二八・〇八	二・五・四三	二・八・三三	三・三・六六	二・八・四九	二・七・〇〇
十一年	三・四・九四	二六・八一	二・五・〇〇	二・七・三〇	三・五・三五	二・七・六	二・三・二五
十二年	三・三・七九	二七・〇四	二・三・四八	二・四・〇一	三・六・一三	二・五・六三	二・五・〇二
十三年	三・三・七九	二七・〇四	二・三・四八	二・四・〇一	三・六・一三	二・五・六三	二・五・〇二

斯くの如く一國又は一地方に於ける乳兒死亡は該地方の生産率の多少により影響を被るを普通とすれども、大都市に於ては其の趣きを異にし必ずしも生産率の増減に相伴はざるものがある、即ち本邦大都市の生産率は一般に全國平均に比し低率なるに拘らず其の乳兒死亡率は通有的に全國平均よりも高く殊に大阪市の如きは生産率最下位にあるに拘らず其の乳兒死亡は最高位である、斯くの如き現象は一面居住者の年齢又は移動等により生産率を統計上低下せしむるにあらずやと考ふべき餘地ありと雖他面大都市の影響により乳兒に對し大なる不良原因の作用しつゝあるを想像せしむるものである。要

するに本邦の生産率は歐米諸國の年々減退するに反し年々増加して居る、而して生産と乳兒死亡との關係は生産率比較的高き地方に於ては概して乳兒死亡は高率である然れども一面都市に於ては一般に生産率低く乳兒死亡は大である。

五、公生子と私生子との乳兒死亡關係

本邦に於ける私生兒の出生は最近十箇年間はさしたる變化なく寧ろ既往に比し遞減し大正十三年に於ては出生百中私生兒は七・六%となつて居る、そして歐洲諸國に比べて略ぼ中位にある、然しながら本邦の私生兒は其の出産の約一五・%強は常に死産である、又地方に於ける私生兒の生産率は大正十三年の統計に依れば近畿、中國、東部、四國、岐阜、愛知、宮崎、長崎及び北海道に多く其の率は全國平均七・五%(生産百中)を超過し就中大阪府は全國中第一位を占め一三・三%に達して居る、次に本邦六大都市の状況を見るに既往に於ては其の率相當高く大阪市の如きは二三・九%の高率を示したるも近來年々遞減して居る、然れども其の歩合は東京市を除きたる他は何れも尙ほ全國平均より高く大阪市は最高で平均一三・〇%を示し京都、神戸市之れに次で高い。要するに本邦の私生兒出生率は勿論地方の社會的事情により多少の相違あるは免れないが概して地方に低く都市に高い。

由來私生兒は多くの場合其の生母は精神的不安、經濟的生活の困難、親たる資格の不完全或は多く社會的地位の下位にある等會社環境の不利なるのみならず其の私生兒は胎内に於けるは勿論分娩産後に

於ける養護は不良なること多く其の體質は出生當時より已に劣等で生活能力薄弱なる者多く此の劣等性は成育するに従ひ益々顯著となるは争はれざる事實で私生兒の乳兒死亡率は公生兒に比し常に大なるは又當然の事である、從て近畿地方の大都市に見るが如く私生兒多き地方に於ては乳兒死亡率も亦高率となるのである。

各年身分別及生産、死産別 (全國平均) (衛生局年報)

出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百中		出生百中		死産百中		公生百	
------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	-----	--

香川縣	德島縣	山口縣	廣島縣	岡山縣	島根縣	鳥取縣	和歌山縣	奈良縣	兵庫縣	大阪府	京都府	滋賀縣	三重縣	愛知縣	靜岡縣	岐阜縣
八六九	八九六	九三二	九二六	八九〇	八七九	八八〇	九〇二	八八六	八九九	八四九	八八九	九三五	九三五	九〇六	九六六	九〇四
一三二	一〇四	六九	七四	二一〇	二二二	二二〇	九九	一一四	一〇二	一五五	一一二	六五	七五	九四	三四	九六
八八〇	八九六	九三三	九二八	八九四	八八三	八八一	九〇四	八九三	九〇四	八五四	八九〇	九三四	九二六	九〇九	九六六	九〇七
一三〇	一〇四	六七	七三	一〇六	一二七	一二九	九六	一〇七	九六	一四六	一一〇	六六	七四	九一	三四	九三
八七九	九〇〇	九三六	九三九	八九三	八八五	八八七	九一〇	八九七	九〇八	八五六	八九三	九三八	九三三	九一二	九六九	九三三
一二二	一〇〇	六四	七二	一〇七	一二五	一二三	九〇	一〇三	九二	一四四	一〇七	六二	六八	八九	三一	八七
八七九	九〇二	九三七	九三三	八九八	八八八	八九〇	九〇九	八九六	九一〇	八六七	八九九	九三八	九二九	九二三	九六九	九三三
一二二	九九	六三	六八	一〇三	一二三	一二〇	九二	一〇四	九〇	一三三	一〇二	六三	七二	八八	三一	八七
八七七	八九八	九三四	九三九	八九四	八八四	八八五	九〇六	八九三	九〇五	八五六	八九三	九三六	九二八	九一〇	九六八	九〇九
一二三	一〇三	六六	七二	一〇六	一二六	一二六	九四	一〇七	九五	一四五	一〇七	六四	七二	九二	三三	九一

三八

愛媛縣	高知縣	福岡縣	佐賀縣	長崎縣	熊本縣	大分縣	宮崎縣	鹿兒島縣	沖繩縣	全國
八九七	八八三	九二四	九三四	九〇六	九二六	九二五	八七七	九三三	九〇九	九一七
一〇三	一二七	七六	六六	九四	七四	七五	一一三	七七	九二	八三
九〇三	八八七	九三〇	九三三	九三二	九三三	九二六	八八三	九三三	九〇六	九二〇
九七	一二三	七〇	六八	八八	六七	七四	一一七	七七	九四	八〇
九〇五	八九二	九二八	九四〇	九一六	九三七	九三〇	八八四	九二五	九〇七	九三三
九五	一〇九	七三	六〇	八四	六三	七〇	一一六	七五	九三	七七
九〇四	八九六	九三二	九三七	九一八	九三七	九三一	八九〇	九二八	九〇五	九二四
九六	一〇四	六九	六三	八二	六三	六九	一一〇	七二	九五	七六
九〇三	八八九	九二八	九三六	九一三	九三三	九二八	八八四	九二五	九〇七	九三一
九八	一二二	七三	六四	八七	六七	七三	一一七	七五	九三	七九

各都市出生總數百中私生兒數
歐洲のものは一八九九
 日本のは一九〇八年明治四十一年
 明治三十二年
 四十年

海牙	靜岡	マイランド	福岡
四二	八四	八四	九〇
京都	門司	大坂	
二二〇	二二八	二二八	二二九

三九

新	福	廣	東	伯	マ	横	ロ
潟	井	島	京	林	ル	濱	ト
一・四	一・三・二	一・四・四	一・五・三	一・五・九	セ	一・七・二	マ
					エ	一・七・七	
界	民	巴	プ	函	維	プ	
			ダ		納	ラ	
			ペ	館		グ	
			ス				
二五・二	二六・三	二六・五	二七・四	二七・六	三一・七	四三・八	

出生百に對する私生兒の割合
(藤原氏に據る)

全	東	京	大
市	市	都	阪
國	區	市	市
八・一	二・七	一・三	一・七
七・五	二・四	一・四	一・六
七・三	一・三	一・三	一・四
六・三	八・三	一・五	一・八
六・〇	八・〇	一・五	一・五
五・七	七・五	一・三	一・四
五・五	七・五	一・三	一・三
五・〇	六・七	一・〇	一・〇
六・四	八・九	一・九	一・三

横濱市	神戶市	名古屋
一三六	一七三	一三七
一二〇	一三九	一二三
一〇六	一二三	一三三
九三	一〇二	八四
八三	九二	八三
七三	八九	八四
七五	八一	八〇
七五	八二	七〇
九三	一〇八	九四

上述の如く私生児は其の體質不良なると社會的環境の幸福ならざるが爲に乳兒期に於ける死亡率は常に公生児より高きことは國の東西を問はず同一で歐洲諸國に於ては公生子死亡率百に對し私生児死亡率の指數は大約一四〇乃至一八〇であるが本邦に於ては稍之れより少く約一三八の指數を示して居る。

更に私生兒の乳兒死亡率を都鄙別に見るに獨逸プロイセンの私生兒死亡率は都會に多く鄙に少い、然れども獨逸は最近十年間に里子制度大に進歩し私生兒の保護に努めたる爲都市に於ける私生兒死亡率は漸次減少するを見たるも之に反し地方に於ては私生子の死亡率が増加して居る。

生產百中一歲未滿死亡者

プロイセン	年次	公生子	私生子	公生子一〇〇の死 亡に付私生子の死 亡指數
サクセン	一九〇〇—一九〇三年 一八九一—一八九五年	一八・三 二六・五	三四・五 三八・七	一八九 一四六

バイエルン	一八九八—一九〇二年	二三・九	三三・七	一四・一
ウエルツェルベルヒ	一八九六—一九〇〇年	二二・五	三二・〇	一三八
バーデン	一八九一—一九〇〇年	二〇・八	三一・二	一五〇
瑞典	一八八六—一八九〇年	一五・五	二三・六	一五〇
奥太利	一八九八—一九〇〇年	二一・四	二九・二	一三六
伊太利	一八九六—一九〇〇年	一六・四	二三・九	一四六
佛蘭西	一八九九—一九〇二年	一五・〇	二五・二	一六八
和蘭	一八九〇—一八九九年	一五・七	二四・四	一五五
諸威	一八八六—一八九〇年	九・二	一六・〇	一七七
瑞典	一八九一—一九〇〇年	一三・五	一六・八	一七七
フィンランド	一八九六—一九〇〇年	一三・五	一九・〇	一四〇

四二

プロイセン都鄙及公私別乳児死亡比較 (生産百に付)

年次	公生	私生
	都	都
	會	會
	郡	郡
	村	村
一八七六—一八八〇年	二二・二	四〇・三
一八八一—一八八五年	二二・二	三九・八
	一八・六	三一・八

一八八六—一八九〇年	二二・〇	一八・七	三九・五	三三・二
一八九一—一八九五年	二〇・三	一八・七	三八・五	三三・六
一八九六—一九〇〇年	一九・五	一八・五	三七・四	三三・六
一九〇一—一九〇三年	一八・〇	一七・六	三四・一	三一・八

茲に本邦六大都市の私生子及嫡出庶子の乳児死亡率を掲ぐるに兩者共に名古屋市を除き他は何れも全國平均よりも高く殊に大阪市の如きは公、私生児共に乳児死亡率は第一位を占めて居る、即ち本邦に於ては大都市の私生児死亡率は中都市よりも高く全國平均の死亡率は中都市よりも低い、然しながら本邦の大都會は内縁の夫婦多く其の子は私生子として届出でらるゝも其の養護は公生子と大差がない、從て右死亡率は眞の私生児死亡率より低きは當然の事であるが、大都市に於ける眞の私生児死亡率は更に大なるものを想像せしむるのである。要するに本邦の私生児出生率は概して地方に低く都市に高い、而して乳児死亡との關係は概して私生児多き地方に於て乳児死亡多く殊に大都市に於て此の關係は益々顯著なるを認むるのである。

嫡出庶子出生百に付乳児死亡比例 (藤原氏に據る)

元大	正二	年三	年四	年五	年六	年七	年八	平均
----	----	----	----	----	----	----	----	----

四三

全	市	東	京	大	横	神	名
國	區	市	都	阪	濱	戸	古
市	市	市	市	市	市	市	屋
一四九	一五三	一四五	一五九	一七三	一三九	一三八	一五六
一四六	一五九	一五四	一六五	一九四	一七六	一六七	一三四
一五三	一六五	一四三	一九九	二二九	一五二	一九二	一四九
一五四	一七六	一六九	一九九	三三七	一八九	二〇四	一四四
一六四	一八二	一六三	一九七	三三三	一八五	一七六	一八四
一六七	一八三	一七〇	一九〇	二四三	一七七	二〇八	一五六
一八二	一九六	一七二	二三八	三三〇	一九四	一八八	一九五
一六五	一七一	一六〇	一六七	二一〇	一六六	二〇〇	一四七
一六〇	一七三	一六〇	一八九	二二八	一七三	一八六	一五七

私生兒出生百に付乳兒死亡比例 (藤原氏に據る)

全	市	東	京
國	區	市	都
市	市	市	市
二二五	二二四	二二六	二二四
二二〇	二四一	二五三	二五三
二三五	二七三	二六一	二二三
二五四	三〇六	三〇六	二八三
二六一	二九二	三二〇	三〇三
二七三	三二五	三三三	三〇六
二九一	三三六	三〇四	三四三
二七四	三〇六	二七三	三〇八
二四九	二八二	二七五	二八七

六、生後の月(月齡)による乳兒死亡

大	横	神	名
阪	濱	戸	古
市	市	市	屋
二四六	二九三	一六三	一九三
二七二	三三四	二〇七	一五三
三三〇	三三六	三五四	二二五
四一六	三〇三	二七三	一七八
三〇三	三三三	二六六	二二三
三四三	四三八	二九〇	二五三
三九〇	三三八	二七二	三二三
三五五	三五二	三六六	二四三
三三五	三三三	二五一	二二五

乳兒死亡の最も多きは生後一箇月以内にして就中生後一週間以内が最も多い、そして主として先天的全身の虚弱により死亡するものが最も多く其の一部は人工的分娩の爲に受けたる障碍又は養護上の缺陷に基くものである、此の關係は社會的地位の上下に差なく、又公生、私生兒共に見る現象である、而して爾他は多く消化障碍及び痙攣等により滿一箇月内に其の生命を奪はるゝものが多く、第二箇月に至れば死亡率は急激に減少し以後漸次月齡の進むに従ひ減少の度を加ふるものである。

茲にプロイセン、サクセン等の統計を見るに何れも乳兒の死亡は出生後間もなく死亡するもの最も多く、之れに次ぎ多きは出生第一日内に死亡するものである、又バーデンにて乳兒の死亡する時間を調査したるに乳兒死亡の五分の二は生れた最初の一時間であると。

フロイセン日齡より見たる乳兒死亡率 (千人の乳兒中一歳未満にて死亡したる者)

一九〇〇年—一九〇二年

日齡	公生		私生		公生及私生子		日齡	公生		私生		公生及私生子	
	男	女	男	女	男	女		男	女	男	女	男	女
生後直に	一〇八	一三九	一二四	九五	一二二	八	日	一四	二五	一七	一三	一五	一五
一 日	五八	八〇	六・一	四五	五三	九	日	一二	二六	一五	一二	一三	一三
二 日	三三	五三	三九	二九	三四	十	日	一四	三一	一七	一三	一五	一五
三 日	二一	三三	二四	一九	二二	十一	日	一四	二九	一七	一三	一五	一五
四 日	一五	二八	一八	一四	一六	十二	日	一五	三二	一八	一五	一七	一七
五 日	一五	二七	一八	一三	一六	十三	日	一六	三七	一九	一六	一七	一七
六 日	一六	二七	一九	一四	一七	十四	日	一九	四三	二二	一八	二〇	二〇
七 日	一六	二八	一九	一四	一六								

サクセン日齡より見たる乳兒死亡率 (千人の乳兒中一歳未満の死亡したる者)

一八九一年—一八九五年

日	公生		私生		公生及私生子	
	男	女	男	女	男	女
生後直に	二〇二	三〇五	二一五	九三	二一五	九三
五 日	八五	一四七	一二八	一二二	一二八	一二二
十 日	一一六	二一〇	一三二	一二八	一三二	一二八
十五 日	一一八	二三五	一六六	九二	一六六	九二
二十 日	八二	一六六	一二九	七一	一二九	七一
二十五 日	八四	一二九				

フロイセン、サクセンの月齡による乳兒死亡率 (生産子に付)

月齡	フロイセン (一九〇〇年—一九〇二年)		サクセン (一八九一年—一八九五年)	
	公生	私生	公生	私生
一 月	五四八	一〇五三	六五〇	一二三五
二 月	二八	五七	三四四	六六六
三 月	一九三	四九九	三五一	六三八
四 月	一七三	四〇八	三三二	五六一

五 ケ 月	六 ケ 月	七 ケ 月	八 ケ 月	九 ケ 月	十 ケ 月	十一 ケ 月	十二 ケ 月	計
一四八	一三〇	一三〇	一〇九	一〇二	九四	八六	七八	一八三〇
三三二	二七二	二三五	一九五	一六六	一四三	一二三	一〇三	三四六
一七七	一五一	一三七	一二二	一一一	一〇三	九三	八二	二〇〇
一四五	一三六	一二六	一〇五	九八	九三	八五	七六	一七八三
一五九	一三九	一二七	一一三	一〇五	九七	八八	七八	一九四五
二七六	二三六	一九三	一七〇	一四九	一二二	一一三	九九	六三四九
四三六	三三五	二五四	二〇一	一七〇	一三三	一一五	一〇〇	三八七〇
二九四	二三七	一九九	一七三	一五二	一二二	一一三	一〇〇	二八〇〇

次に本邦の事實を見るに明治四十三年乃至大正八年十箇年間の平均は左の如く總乳兒死亡百中一箇月以内に死亡するものは四四・%強で其の六割五分は生後十日以内に死亡して居る、要するに本邦の乳兒死亡は其の二九・%を十日以内に死亡せしめつゝあるのである。

月 齡	乳兒總死亡百に付	月 齡	乳兒總死亡百に付
〇—五日	一六三	一ヶ月—二ヶ月	一二二
五日—十日	一二六	二ヶ月—三ヶ月	七八
一ヶ月未満—十日—十五日	五九	三ヶ月—六ヶ月	一四二

本邦月齡別乳兒死亡 (自明治四十三年至大正八年) 十ヶ年平均

十五日—一ヶ月	九六	六ヶ月—十二ヶ月	二一五
計	四四四	計	一〇〇〇

本邦農村に於ける乳兒死亡月齡 (總乳兒死亡百中) (内務省及各府縣農村實地調査成績に據る)

關東 地方	東北 地方	近畿 地方	東山 地方	北陸 地方	東海 地方	九州 地方
四七八六	四七七八	六三七一	五四三三	三七〇二	二五八	一〇〇〇〇
九五〇	一三三三	六七八	一三三八	二五八	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇
七八三	七三九	五〇八	六三四	八三七	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇
四六六	四四三	五〇八	二二二	七三四	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇
三九二	二九六	—	四三三	五八八	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇
三五四	四四三	三三九	四九三	三三九	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇
三二七	一九七	一七〇	二八三	四五三	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇
三五四	三四五	三三九	二八三	三八五	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇
四六六	三四五	一七〇	一四二	四五三	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇
三五四	三九四	一七〇	四三三	四〇七	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇
四一〇	三四五	一七〇	—	四九八	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇
三七二	四四三	六七八	三三三	四五三	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇
計	—	—	—	—	—	—